「あなたが孤独なのは、
あなたが孤立しているからである。
あなたがしっかりと
控え目な態度をとれば、
けっして孤立することはないだろう。
権力と名声ほど、
私たちを孤立させるものはない。
もしあなたが
身を低くするべくつとめ、
謙虚になることを学ぶならば、
あなたはけっして
孤立することはないであろう。」
『ユング名言集』(PHP研究所)より

C.G.ユング(1875〜1961)

## 涅槃会(涅槃節):ねはんえ、ねはんせつ

ガンダーラの菩薩像

2月15日は、およそ2500年程前、お釈迦さまが80歳で亡くなられた日です。

お釈迦さまは、35歳でさとりを開き、ブッダ(真理に目覚めた者・覚者)と成ってから、いのち終えるまで、ガンジス河流域中央部を中心に、多くの人々に目を覚ます教えを説き、悩みや苦しみに生きる人びとに関わり、真実の拠り所を示し、生きる尊さと勇気を与えました。

お釈迦さま亡き後、仏教徒は、「お釈迦さまは亡くなられた」とはいわず、「涅槃に入られた」と表現しました。

これは、お釈迦さまは、煩悩をなくした完全なるさとりに入られ、そして、今も、そのさとりの智慧と慈悲をもって私たちを救い続けていてくださっている、と実感した仏教徒の人びとがいたからこそ、そのように語られ続けたのです。

## 如月忌(きさらぎき)

大正三大美人(九条武子・柳原白蓮・林きぬ子)といわれた、くつろぐ九条武子女史

また、2月7日は、浄土真宗の教えを生きた九条武子さんが、数え42歳(満40歳)で亡くなられた日です。

女史は、仏教主義に基づく女子教育の振興につとめ、日本初の女子高等専門学校(旧制、現在の京都女子大学)の開学に貢献しました。

1923年9月1日の関東大震災では、自身も被災しながら一命を取りとめ、被災者のために最前線で救援活動にあたりました。

両親を失った子どもや不良少女を保護する施設として、昭和元(1926)年、六華園(りっかえん)を設立されたり、誰もが充実した医療が受けられるよう、あそか病院設立に尽力されるなど、さまざまな社会福祉事業を推進しました。

彼女の葬儀が築地本願寺で勤められたとき、数多くのホームレスな人たちが焼香に参列したと伝えられています。浄土真宗ではその命日を如月忌として、仏教婦人会を始め色々な集いで、仏教の教えに生きた念仏者としての生き方を顕彰し、法要を勤めています。

## つながるいのちを発見する生き方

ふたりに共通するところは、貧窮(ひんきゅう)する人びとの中にはいっていき、惜しむことなく尽力されたことです。

私は小学生時代、築地本願寺のカブスカウトとして、当時少女の養護施設だった六華園を一度だけ慰問に訪れました(多分、当時は、荻窪駅の近くでしたが、未だ、アスファルトではなく、土の庭や植え込みが記憶にあります)。その時、同級生だった友人が女装をしてシンデレラ姫を、私が王子様を演じました。

木立に囲まれて、ストーブで暖かかった六華園のあの日のことを今でも思い出します。そして、少女たちを励ましそうと意気込んでいた私が、逆に施設にいる彼女たちに励まされたような、忘れていたことを思い出させてくれたような不思議な思いを抱きました。

思えば、社会福祉や今でいうソーシャルケアを通して、他者と関係をもつこととは、実は、そこに繋がり合って成り立っていた自分自身の姿を見つけることです。

そして、その発見は、相手をというより、自分自身を勇気づけ、あるいは意味づけをしてくれることでもあると仏教から教えられます。なぜならば、仏教の縁起の教えとは、いのちは支え支えられ合って成り立っているということであり、実は私自身が支えられ成り立っていたと気づかされ、目が覚める教えだからです。

2011年度は、親鸞聖人750回大遠忌が勤められます。浄土真宗本願寺派の法要スローガンは、「世のなか安穏なれ」(『親鸞聖人御消息』より)です。これは、先のお二人の生き方から言えば、世の中の不安・悩み・貧しさに対して具体的に行動するところに、仏法がひろまっていくのだと教えられました。

決してその逆ではないと思います。つまり、仏法が素晴らしくとも、それを理屈で説くだけならば、人びとに生き方がひろまることはなく、ただ知識としてのみ伝わるだけだということです。今日、知識のみに向かう仏教のあり方が問われています。お互い心して、仏法の生き方を求めたいものです。

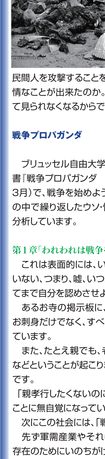
合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　会費はいずれも資料・茶菓代として千円です。お待ちしてます。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

聖典の言葉

「わがこころのよくてころさぬにはあらず。
また汝せとをおるふも、
百人・千人をころすこともあるべし」
「さるべき業縁のもよほさば、
いかなるふるまうもすべし」
いずれも『歎異抄』第13条より

## 史上の大虐殺の一つ～東京大空襲



1945年3月10日の未明、東京下町に向けて米軍の無差別爆撃が行われました。その結果、市民10万人が一夜にして殺され、100万を超える人が被災しました。

約半世紀前、1899年に締結されたハーグ条約は、たとえ戦争といえども民間人を攻撃することを禁止しています。にもかかわらず、何故このような非情なことが出来たのか、それは、偏ったウソの見方によって、人間を人間として見られなくなるからです。

## 戦争プロパガンダ

ブリュッセル自由大学アンヌ・モレリ歴史学教授は、著書「戦争プロパガンダ　10の法則」（草思社、2002年3月）で、戦争を始めようとする政府とメディアが、歴史の中で繰り返したウソ・情報操作の方法・正義の捏造を分析しています。

### 第1章「われわれは戦争をしたくはない」

これは表面的には、いかにも「まとも」な言葉に聞こえますが、問題を見ていない、つまり、嘘、いつわりの言葉です。先ず私たちは、相手の存在を否定してまで自分を認めさせようという心がありません。

あるお寺の掲示板に、「生きたまま表彰したのが一番美味い」とありました。お刺身だけでなく、すべて生きたまま殺してあげて、美味しいおいしいと言っています。

また、たとえ親でも、老老介護などで縁に触れると殺意を持って親族殺人などということが起こりますが、それは人のことを言っているのではないようです。

「親孝行したくないのに親がいる」という高齢化社会を私たちは生きていることに無自覚になっているようです。

次にこの社会には、「戦争をしたい」人がいるという事実を隠します。

先ず軍需産業やそれに関わる人びとや軍部の指導者たちは、自分たちの存在のためにいのちがけで、戦争をしたがります。

養老孟司さんは、「以前を読みながら考えた」双葉社の「是か非か」に、「戦争で怨びた人も、恩どうてんかいない人も、敗戦で儲けた人も、損した人もいる」と指摘しています。だからこそ今、実際に教育基本法を変え、改悪手続法（国民投票法）を作ろうとする人がいるわけです。

### 第2章「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」

戦争開始前には、相手国が戦争を望んでいると思い込ませる情報を流します。1931年、日本軍が、中国東北部の柳条湖事件を起こし、軍部も天皇も相手が始めた戦争だと嘘をついて戦争を始めていることを、国連のリットン調査団が解明しています。また、1941年12月7日の真珠湾攻撃も、事前にアメリカ政府は情報を得ていたにも関わらず、日本が始めたという情報を流す工作活動をしていたという事実があります。どちらの政府も、そして、時代を超えて国家を戦争に誘導するのは、大恐慌やネットバブルのデフレから脱却するという経済問題が大きく背景にあります。

### 第3章「敵の指導者は悪魔のような人間だ」

政府や軍部の情報操作によって、簡単に人心は左右され、洗脳されてきたのが歴史の事実です。映画監督森達也さんが、サリン事件を題にしたオウム真理教の信者の実態を示した映画「A」などを見ると、悪魔だと思っていた人が、自分たちとまったく同じ喜怒哀楽を生きるごく普通の人間だということがわかります。敵も味方も同じ人間だからこそ、こ嫌ス嫌で私たちは、鬼にもなれば、仏にもなります。その鬼という言葉を相手に押しつけて敵を作ったのが、戦争中の「鬼畜米英」というスローガンでした。鬼ですから、人の姿でも人ではありませんね。殺しても構わないという論理で人間を洗脳しているのです。親鸞さまは、「さるべき業縁のもよおさば、いかなる悪鬼羅刹もすべし」「歎異抄」第13条という言葉で私たちの生き方を示しています。

### 第4章「われわれは誠上や崩壊のためではなく、偉大な使命のために戦う」

「神の正義」や「大東亜戦争」という大風呂敷を広げるのは、戦闘で死者が増えると戦戦気分が生まれますが、それを覆す手法として「偉大な使命」という理念が後から生まれるのです。

### 第5章「われわれも誤って犠牲を出すことがある。だが敵はわざと残虐行為におよんでいる」

戦争が進むと、自分たちが相手の一般市民を殺しても誤爆だったという言弁は、湾岸戦争やイラク戦争で大きく報道されました。しかし、相手国が自国の市民を殺すと残虐行為だと言います。イラク軍の兵隊はアメリカに拘束されましたが、後になってこちらの人質をアメリカ側が守られていないことが分かりました。しかし、そうした情報も操作され、私たち自身も関心を示そうとしません。

### 第6章「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている」

イラン戦争の時、アメリカはダメイジドウラニウム爆弾（劣化ウラン爆弾）を用いました。また、クラスター爆弾・地雷など非人道的な武器が使われるといいます。しかし、「人道的な武器」という言葉は、実は矛盾があります。いったい人を殺す武器に、人道的な武器とそうでない武器を定義するのは矛盾そのものです。人道的な立場に立った浄土真宗本願寺派安芸教区の人びとは、「月光無用（ひょうがむよう=弓矢を生きる人びとがいるところには兵隊も武器も無用となる）」というバッジや、同長野教区の人びとが作った「プロテクト9（悪法九条を守れ）」のバッジには、武器そのものを頼りとしない人間の生き方があります。

### 第7章「われわれの受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大」

かつての大日本帝国の大本営発表も、現在の戦争当事者政府も同じ傾向の発表をしている。それは、相手国の死亡者は数多く発表するが、自国の死者数は隠蔽しようとする。近代社会においては、国家を「国家」として認識される考えがあるが、私たちは平和と反戦を考える時、戦争をする可能性の高い「必要悪」としての政府の発表や解釈を疑う必要がある。そして、なにかも国家という権力の横暴から、国民を守るために国家に約束させたのが憲法であるということを主権者である国民がしっかりと認識しておくべきである。

### 第8章「芸術家や知識人も正義の戦いを支持している」

戦争遂行のために当局が芸術家を取り込むことは、取り込めない芸術家を排除し弾圧をして、表現の自由を奪う社会を作り出すことになる。負欲テロである9.11の直後、イマジンなどの平和を訴える歌をアメリカ社会は自主的に排除したが、その中でただ一人の女性の国会議員がイラクへの爆撃の不当性を訴えていた。

### 第9章「われわれの大義は神聖なものである」

神の正義を掲げて、それを人びとに押しつけているということからいえば、日本の大東亜戦争とは国家神道を用いた宗教的な洗脳といえる。浄土真宗本願寺派の京都女子大学の徳永道雄教授が、同大新聞「芳陀利華」で仏教は正義を説かないと論じている。自分の正当性を掲げることの迷いを目覚めさせる立場を奪うのが正義の主張である。

### 第10章「この正義に疑問を投げかける者は異端り者である」

イラク戦争は、大量破壊兵器があるとは言えつつ始めた侵略戦争でした。先の米国女性国会議員は、ラクへの爆撃の不当性を訴えていたために、議衆がけくぼとの批判を浴びていたのである。あっという間に、起訴された国家主義国家、全体主義国家に変わってしまう。また、簡単に変えることができるほど、人びとの意識は、当局の扇動に脆弱であるということである。

### 本願寺派の裏根と反省

為政者は政治宣伝により、敵を悪魔と思い込ませ、殺すことを聖戦の偉業だと褒めます。しかし相手から見ればその姿も悪魔に他なりません。人を魔にさせるものを鬼神の教えといいます。

政治宣伝は同時に正義という偏った考えを押しつけます。自分こそ正義だと思い込む時、相手を見下し、思い上がり、自分の主張を押しつけるために戦争という暴力を振るう道うを犯します。

かつて、私達の教団も、過ちに加担した悲しい過去があります。戦時中、様々な要因はありましたが、全体主義に迎合し、み教えを次のように曲解したのです。

「正法とは天皇の命令。この戦争は天皇の命令なる聖戦。戦闘は菩薩行。背くと浄土に往生できない。戦死したら必ず浄土往生する…」

こうして戦争に赴く門徒を精神的に後押しし、仏具を武器の原料に供出したりもしました。

大谷光真氏曰まは、「宗祖の教えに背き、仏法の名において戦争に協力していた過去の事実を、仏祖の御前に懺悔しなければまにまなら」（終戦五十周年全戦没者総追悼法要）、「亡くなられた方々を仏さみ、悲しむことを縁として、この私が仏法にめざめ、人間の罪業に気付き、その上で、亡くなられた方々の心を受けとめる」（第12回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要）と示されました。事実を真正面から受け止め、慚愧のひかりを繰り返さめより決意することが、真の追悼だと感じます。

理屈や掟だけでは平和は生まれません。親鸞聖人の「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」の教示を基に、専制体制でなく民主的に「ともにいのちがやく世界」を目指して、行動を通した非戦平和の決意を世界や次代に伝えていきたいです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

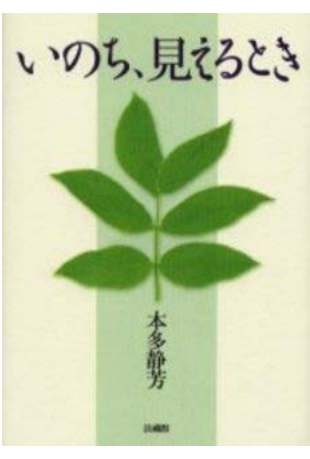
※ご縁のあったあなた！　第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」で「正信念仏偈」を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で「親鸞聖人御消息集」を学びにいらっしゃいませんか？

会費はいずれも資料・茶菓代として千円です。お待ちしてます。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鐘の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

『パワー(呪術)の宗教』と
『道(道理)の宗教』

「震災は、自然の背景にある神や仏のパワーによって生じた天罰だ、という宗教観が昔からあります。
仏教の教えとは、この世の中には、そのようなタタリを与える神仏はどこにもいないということに目を覚まして下さいという道理、ことわりをよりどころにしようとする教えです。」




拙著
『いのち、見えるとき』
法藏館12頁より抄出

親鸞聖人のお姿

## 親鸞聖人の手紙から学ぶ

なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。

ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ。

まづ善信が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定(けつじょう)のひとは、疑なければ正定聚(しょうじょうじゅ)に住することにて候ふなり。さればこそ愚痴(ぐち)無智の人も、をはりもめでたく候へ。(略)

文応元(1260)年十一月十三日　善信(親鸞)[八十八歳]

[意訳]

何よりも、去年と今年、老少男女、多くの人々が、お亡くなりになられたこと、悲しいことです。

ただし、生・老・病・死の無常(私の思い通りにならない)という道理は、釈迦如来が、かねて詳しくお説きになっていることですから、驚き思し召すことではありません。

まず、善信(親鸞)の身の上から申せば、(信心の私たちは)臨終の際の善し悪しは問題になりません。信心が定まった人は、(浄土に往生していく人生に)疑いがないので、すでに、正定聚(不退転)の位に住していることになります。ですから、愚かで(仏の)智慧無き者であっても、臨終はめでたいことなのです。

## 御同朋・御同行という宗教文化コミュニティの誕生

これは晩年近い親鸞聖人が京都から、かつてお念仏の教えをよろこぶようになった関東の同行・同朋に向けて送った手紙です。(親鸞さまは、42歳で流罪の地、越後から関東へ移住。62歳頃、京都に帰る)

「おどろきおぼしめすべからず」「をはりもめでたく」というように、日々お念仏を称えて、信心という目覚め、気づきの体験を共にした同じ仏教的な文化を共にするお仲間に向けた書かれた内容であることが分かります。つまり、この世で念仏の信心を頂いたものは、どのような亡くなり方をしても、「仏に成るべき身に成」っているから、必ず仏と成って、人びとを救っていく仏になるということの再確認と、それをめでたいことだと言い切れる生き方が恵まれることがうかがえます。

また逆に、この手紙から、真宗の念仏の教えに出あいながら、「臨終の善悪」を問題にして、それが人生の救いに関わるかのように思い違いをしていた念仏者がいたことが想像できます。

当時、『吾妻鏡』によれば、1257年に鎌倉直下型大地震が起こったことが書かれています。また、1259～60年は、天変地異が連続し全国的大飢饉になったと岩波書店『日本古典文学大系』82に解説されています。

## 被害が、なかったのは、○○のご加護か?　震災は天罰か

ある方が、「地震で家の中は散乱したけれど、ピアノだけは大丈夫でした。これも音楽の神様のご加護です」と言いました。心を傾けやすい表現ですが、もしピアノだけ壊れたお家は、音楽の神様が守らなかったということになるのでしょうか?そこから、私たちの「ご加護」という宗教的な発想が問われます。

「パワー(呪力)の宗教」と「道(道理)の宗教」という学説があります。

パワーとは、自然の背景に不思議な力をもった神仏がいて、それに拝めばいい目に、拝まないと悪い目、災害に遭うという宗教です。日本の神道がこれにあたり、萬(ヨロズ)の神がいて、それぞれが専門のパワー(雨、風、縁結び、学問など)を持ち、祈ったり願ったりすると現世利益が得られると説きます。パワーは多ければ多い程よいので、あれもこれもと異なる宗教を重ねて拝む宗教文化が生まれます。

一方、道とは、道理、ことわりです。道を学び歩めば、あれもこれもという訳にはいきません。一つの道理を選べば、他の道理の宗教を重ねることなく、結果として他の宗教とは重なりません。富士山に登るのに道はいくつもあっても、私が歩める道は一つということです。

ところが、奈良時代に仏教が日本で広まる時に、本地垂迹説や神仏習合としてパワーの宗教と重ねて仏教を取り入れました。分かりやすくいえば、仏教にはパワー(おまじないの力)があり、その力で死んだ者を鎮め慰める鎮魂慰霊の宗教として受け入れたり、国家を安泰にするパワーがあるとして鎮護国家の宗教としました。その結果、人生を生きる道理(教え)が説かれているお経を「呪文・おまじない」として利用するという形で日本では仏教が、この二つの側面で受け入れられました。

しかし、これをはっきりとさせたのが、鎌倉新仏教の流れです。日本史の教科書では、鎌倉仏教は民衆のために生まれたと解説してます。間違いとは言い切れませんが、本質的には、今いったパワー(おまじない)の側面を排除し、切り捨てたのが法然さまや親鸞さま、そして、道元さまの仏教の性質だといえます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　会費はいずれも資料・茶菓代として千円です。お待ちしてます。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

**思い込みと思い当たること**

**「まつたく自見(じけん)の覚語(けんご)をもつて、**
**他力の宗旨(しゅうし)を乱ることなかれ。**
**よつて、故親鸞聖人の御物語(おんものがたり)の趣(おもむき)、**
**耳の底に留むるところ、**
**いささかこれを注(しる)す」**

**『歎異抄』「前序」より」**

東日本大震災の直後に発生した千葉県市原の石油コンビナート火災
（2011年3月11日、住職撮影）

まさに「地に足が着いてなかった」のでした。

ちょうど半年前の3月11日、私が搭乗していた15時10分羽田空港到着予定の全日空機は、千葉県市原市上空を何度も旋回を繰り返していました。その窓からは同じように旋回をする旅客機が数機見えました。

機長から、「東北地方で大きな地震が発生した影響で、着陸許可が出るまで上空で待機中」というアナウンスがありましたが、その時には眼下のコンビナートから次第に大きくなる茶色い煙の火事が、私には東日本大震災と結びつきませんでした。

約20分後、平常時は主に日本航空が使用している第一ターミナルの滑走路に着陸してから第二ターミナルのゲートに到着しましたが、相次ぐ余震の影響でボーディング・ブリッジが取り付けられず、そのまま機内で20分ほど待たされました。

機内ではイヤホンサービスで、NHKラジオ第一放送が聴けることを思い出しました。まず私の耳に飛び込んだのは、男性のアナウンサーの声で、「車が何台も流されています」でした。

想像してください。1時間以上も前から、情報と隔絶されていた私は、このニュースを聞いても、それまでの体験や知識とは結びつくことがないまま、それが何を意味しているかを理解できませんでした。

機内に閉じ込められた私たちに、機長は携帯電話の使用を許可したので、早速、私は家族に帰宅が遅れることを伝えようとしましたが、電話がつながりません。このときも、私の頭の中では、「やはり、機内だと周りはジュラルミンなどで覆われているので、電波が届きにくいのだろうか?」という、寝ぼけたような発想が生まれました。

## 自見の覚悟

たとえ、目の前に、あるがままの事実が伝えられる言葉が語られていても、あるいは、その状況そのものがあっても、自分の知識や体験と結びつかないとまったく意味がありません。それどころか、自分の思いこみの知識や偏った体験が、かえって誤解を生むことすらあります。
親鸞聖人(1173～1263)の言葉の聞書きだといわれる『歎異抄』の冒頭に、次の言葉があります。

**まつたく自見の覚悟をもつて他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところいささかこれをしるす。**

訳）けっして、自己中心の思いこみで、親鸞聖人の他力の教えを乱してはならない。そこで、亡き親鸞聖人の語られた意趣を、私の耳に残っているほんの一部分をここに記します。

『歎異抄』の編者は、その冒頭のまえがきに当たる「前序」で、自見の覚語ということを示し、そのようなあり方が教えを誤って受けとめ、かき乱してしまうと指摘しています。

この言葉はちょうど、飛行機の中で、アナウンサーが語っている的確なニュースの言葉を聞いても、あるいは地震直後は、携帯電話が通じにくいという事実に出会っても、いずれも自分の乏しい知識や狭い体験のなかで、いわゆる「思いこみ」が事実を事実として受けとめることができずにいたことと重なって受けとめられたのです。

## 天災と天罰

震災は、自然の背景にある神や仏のパワーによって生じた天罰だ、という宗教観が昔からあります。こうしたパワーを説く宗教は、日本の場合、神道に顕著にみられ、それぞれの神が役割分担をして、風の神、雷の神、学問の神、縁結びの神などといい、それらに拝めば自分の都合が満たされるという素朴な思いをもとにして成り立つものです。

しかし、それは同時に拝まなければ自分の都合が満たされない、あるいは、きちんとした態度で拝まないならば、パワーをもつ神や仏によって災いが起こるとも受けとめる意識をもたらします。

ある音楽教室を開いている方が、この度の東日本大震災で、自宅の家財道具が大きな被害を受けたけれども、ピアノだけは傷一つつかなかったことを、「音楽の神様が守ってくれた」とおっしゃいました。この言葉を多くの人が受け入れているのは、パワーを説く宗教観が背景にあるからでしょう。

しかし、もしも仮に、こんな音楽教室があったら、どう思われますか？　その家では、家財道具は何一つ傷つかなかったけれども、ピアノだけが損害をうけたとします。すると、「音楽の神様が守ってくれなかった」ということになるのでしょうか。

どうも、私たちがパワーの宗教を受け入れる時には、都合のよいことがあった時はなるほどそうだといえるけれども、自分にとって都合のよくないことが起きた時には受け入れないどころか、そのようなことを考えていた自分すら忘れているようです。

そういう意識が自然災害を受けとめた時、人間が自然の背景にある神や仏の思いに背いていたために起きた「天罰」だという考えが生まれます。しかし、「音楽の神様が守ってくれなかった」といわれた方がどう思うかということと同じように、被災をされた方を無視し、さらに自分の生き方を浅いものにするようです。

## 道理～思い当たる生き方

この世の出来事は、不思議なパワーを持つ神や仏が決めているというのは道理に背いた、思いこみで、人間の迷いが作り上げたものだと気づかせる教えがあり、仏教といいます。

まことの教えをより所にして、そのおつとめを実践するところに、今まで気づかなかった自己中心的な自分と、その私を支えてくれている多くの恩恵に生かされていたと思い当たる道理、ことわりをよりどころにして、現実の人生を生きよと教えるものです。

仏教は、お恥ずかしいという謙虚な心を生みだし、同時に、おかげさまという素直な心を生みだす道理に基づく教えです。それは、訳の分からないものを多分そうだろうと思いこむのではなく、自分のあり方を通して、なるほどこういうことだったと気づく生き方を開いていくものです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　会費はいずれも資料・茶菓代として千円です。お待ちしてます。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

## 信心の生活
## ～「仏壇の論理」と「台所の論理」～①

**噫、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、**
**真実の浄信、億劫にも獲がたし。**
**たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。**
**（『顕浄土真実教行証文類』「総序」）**

これは親鸞聖人が、阿弥陀如来のご本願（弘誓）に出会えたことを本当にありがたいことであり、真実の信心が私に生まれたことをめったにないことだなあと、感慨をこめてお書きになった文章です。

この後半にある行信という言葉が、今回のテーマにつながるところです。行とは念仏の生活ということです。信とは仏法の信心のことです。念仏による信心を獲たこと、それは宿縁ですから、自分では思いもよらないさまざまなご因縁によって成り立ったことだなあというわけです。

これをお読みになっているみなさんも、そうではないですか。ご両親のおかげ、あるいはご先祖のおかげ、いろいろなかたちでのおかげさま、それらのご縁が我が身の上に成り立って今、こうした浄土真宗のお話を聞いているわけです。

みなさん、今朝の朝ごはんは何でしたでしょうか。私は和食のときは、お味噌汁が楽しみです。なかでもワカメの味噌汁が好きです。今朝ワカメの味噌汁を召し上がった方もいらっしゃることでしょう。もし「私はワカメと味噌汁を食べました」と言ったらどうでしょうか。「ワカメと味噌汁」と言ったら、お碗の中にワカメが入っているのではなく、味噌汁とは別にワカメの和え物か酢の物が置いてあるのを想像するでしょう。

今回のお話を「信心と生活」ではなくて、「信心の生活」という題名にしたのは、まったく具の入っていない味噌汁と、ワカメの入った味噌汁では味も香りも違ってくるのと同じように、暮らしの中に信心が入ったならば、何らかの形でその生活が変わるのではないか、それを示そうと思ってこの題を掲げました。

副題に掲げた「仏壇の論理」と「台所の論理」は、これが別々のものではなくて、どこかで必ず重なり合っていくというのが、親鸞聖人から教えられているところの浄土真宗という仏教であると私は受けとめています。私は在家仏教協会というところでお話をすることがありますが、その「在家仏教」という言葉がそれを表していると思います。なお、亀井鑛先生の、『聞法一〇〇話』（法藏館）に、「仏壇の私・食卓の私」という題の寸話があり、それに影響を受けています。

### 二つの原理があってよい？

私は築地本願寺のすぐ隣にあった万行寺という寺の一人息子として生まれました。私の代で東村山市に寺を移転したのですが、寺の子どもとしてそれなりに仏法を聴聞してきました。大学生のころだったでしょうか、先に示した在家仏教協会の講演会ですとか築地本願寺の仏教文化講演のお話を聞きに行ったりしながら、私の中に、素朴な疑問として、宗祖の親鸞聖人がおっしゃっていることと、本願寺八代目の蓮如上人がおっしゃっていることは、言葉使いは似ているけれども、何か本質的なところで違いがあるのではないか、そんな気持ちを持っていました。

その時ご指導いただいていた先生にそれを尋ねてみたりもしたのですが、それは君自身の課題としてこれから勉強していきなさいと教えてくださいました。そして私がたどりついたのが、龍谷大学名誉教授の信楽峻麿先生のご本や論文でした。先生のご近著に『真宗学シリーズ①　現代親鸞入門』（法藏館）があり、こういうことが書かれています。

「真俗二諦論」という考え方があって、これは本願寺が生まれた初期のころ、親鸞聖人の曾孫にあたる本願寺三代目の覚如上人に始まって蓮如上人へと続く伝統教学の系譜です。本願寺という名前を掲げたのは、この覚如上人の時代になってからです。

余談になりますけれど、今年（2011年）は親鸞聖人の七百五十回忌という大法要が、京都を中心に勤められますが、もしもタイムマシンがあって親鸞聖人が現代に来たらびっくりするでしょうね。「あの大きなお寺の大法要は何ですか？」「あれはあなたのお寺、本願寺で、あなたの七百五十回忌の法要が勤められているのですよ」「ええっ？」親鸞聖人は本願寺という名前もご存じないのですから。

覚如上人が、真俗二諦ということを説きました。真とは仏法のことです。俗とは世俗ということです。諦というのは真理という意味です。二つの真理があってよろしいとおっしゃった。それが 現在、浄土真宗本願寺派の伝統教学の根源になっているわけです。

私たちがこの世を生きるのに、二つの原理があってよいという。お仏壇の前に坐っているときは仏法の原理です。ところが一歩仏壇の前を離れて台所に入ったら、台所の論理でよろしいというわけです。

仏壇の前に坐っているときは、お念仏を称えて、仏さまの教えに出会う。ところが、一歩仏壇を離れて、お寺の場合で言うと、本堂から庫裏の方に帰ってきたら、庫裏の生活に切り替えてよい、と。これはお坊さんとしては、ある意味でたいへん都合のよい話です。その場その場で使い分ければいいのですから。

しかしこれは果たして、親鸞聖人のお示しになったものでしょうか。先ほど読んだお言葉に「たまたま行信を獲ば」とありました。行は生活、信は仏法。これをいつもセットでお使いになっています。行と信は別のものではないのです。信心を離れた念仏はなく、念仏を離れた信心はありませんというのが親鸞聖人のお示しであったわけです。

この二つの原理、真諦と俗諦、心と体、信心と生活を使い分けるというのが、本願寺の伝統教学の主張なのです。どこで間違ってしまったのでしょう。もう戦後66年を過ぎましたが、戦争中に日本の伝統的な仏教教団は、仏法の論理と世俗の論理を使い分けるという立場をとりました。だから、このたびの戦争は聖戦ですよと言い、これに協力するのは世俗の論理として正しいのだと、仏法者の立場で言ったのです。戦後になって、これはどうもおかしかったと反省したのですが、真俗二諦という基本構造は今もって変わっていないのです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　会費はいずれも資料・茶菓代として千円です。お待ちしてます。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。